

紙が好き -- インドネシア・コイン事情（特集 途上国とコイン）

著者	濱田 美紀
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	215
ページ	14-15
発行年	2013-08
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00003645

紙が好き——インドネシア・コイン事情——

濱田 美紀

コイン事情というタイトルであるが、「金^{かね}つていうのは紙幣だろう」そんな声が聞こえてきそうなインドネシアである。

● 一円を笑うものは一円に泣く

そんな言葉が表すように日本人はお金を大切に（ような気がする）。昔は道によく小銭が落ちていた。当時は、今ほど自動販売機があふれていたわけでもなく、道端にお金落ちていた理由も見つけにくかったように思う。だから、小銭が忽然と道の真ん中に落ちているのを見つけると、ちよつとどきどきした。こっそり拾った時であれば、気になりながらも素通りした時もあった。ただ最近では、そんな小銭にはあまり遭遇しない気もする。自動販売機の脇には落ちていくかもしれないが、ところ変わって、一〇年ほど前

のジャカルタ。当時爆弾テロの続いたジャカルタでは、テロ対策としてホテルに来る客の車は必ず入口前で止められ、検問を受けるようになっていた。その日、日系のホテルの入り口付近で一次停止を求められた車の窓から見たのは、無残にひきつぶされたコインの塊だった。一瞬ぎよつとした。コインというよりはアルミの固まりにしか見えない。だが、まだつぶれていないものもある。大量なコインの残骸だった。正視するのがためらわれる光景である。なにしろ「お金」が踏みつぶされているのだから。日本人だとなんとなくバチが当たりそうな気になる。だが、インドネシアの人たちはまったくの無関心で、拾う様子もない。門番も、仲間と談笑したまま片付ける様子もない。コインの残骸は、次々と車に轢かれて、どん

どん形を失っていった。歩道橋や道端では物乞いをする人もまだいるジャカルタのこのコインの様子がずつと頭の隅に残った。インドネシア人はプライドが高いといわれるので、（どこの国もそうだろうが）人前でお金を拾うなど恥ずかしいくてできないのだろうか？だが、これが紙幣だったら別なのではないか、そう思ったのだった。

● 硬貨なんか受け取れねえ

話は少しそれるが、ジャカルタのタクシー料金の支払いは、メーターに示された料金を一〇〇〇ルピア単位で切り上げた金額を支払う（若干多めに渡す習慣がある）。お釣りを持ち合わせない運転手が多いので（持っていてお釣りがないといつては、あわよくば多めにもらおうとする。）小さい額のお金が必要になる。以前、

タクシー代が三万二五〇〇ルピアというような金額だったときの話。この場合、三万三〇〇〇ルピアを渡すことになり、二万ルピア札一枚、一万ルピア札一枚、二〇〇〇ルピア札一枚、五〇〇ルピア硬貨二枚を渡した（本来なら一枚でいいのだが）。すると「小銭はいらねえ」と受取りを拒否された。どうも三万二〇〇〇ルピアでいいらしい。たまたまそういう運転手だったのかどうかは定かではないものの、ジャカルタのタクシーらしからぬデイスカウトである。損をしてでも「小銭なんか受け取れねえ」のである。

この逸話を裏付ける調査報告書があった。中央銀行クンダリ支店のサーベイである。題して「硬貨選好に関する調査」。まじめな調査である。東南スラウェシ州都クンダリで二〇一〇年に実施された。なかに「過去、硬貨を受け取らなかったことがあるか」という質問がある。銀行、商人、個人の回答者のうち多数ではないものの「硬貨を受け取らなかった」という回答があった。商人や個人が硬貨を受け取らない理由としては「しまっておくのが大変」「なくしやすい」「受けとらない人が多い」



筆者撮影

「また交換するのが面倒」「持ち歩くのが重い」「持ち歩くのが面倒」などの理由であった。「一円を笑うものは一円に泣く」ということわざを覚えてあげたいインドネシアの人々の好みである。

現在、インドネシアで铸造されているコインは、一ルピア、五〇ルピア、一〇〇ルピア、二〇〇ルピア、五〇〇ルピア、一〇〇〇ルピアの六種類である。日本円にして一銭ほどの価値の一ルピアは法定通貨ではあるものの、ほとんど流通していない。さらに五〇ルピア、一〇〇ルピア、二〇〇ルピアにも、お目にかかれるのはおつりが自動的に計算されるレジのある大きなスーパーくらいである。小さなスーパーや地方では、おつりのかわりにレジに「アメ玉」が準備されていて、おつりはアメ玉で戻ってくることもある。

ちなみに紙幣は、一〇〇〇ルピア札、二〇〇〇ルピア札、五〇〇

〇ルピア札、一万ルピア札、二万ルピア札、五万ルピア札、一〇万ルピア札の七種類である。コインの流通は金額にして現金流通量の一・二％程度である。一〇〇〇ルピア札も流通しているが、二〇一〇年からは硬貨も铸造され始めた。硬貨にした理由としては、インドネシアは国が広く、古くなつた紙幣の回収にかなりの時間が必要とする。そのため、耐久性のある硬貨への移行を図つたという説明であつた。確かに地方に行くと、ジャカルタではお目にかかれないような古いお金が流通している。紙幣にいたっては、多くの人の手に渡ってきたため、途中までちぎれかかった、手垢にまみれてしつとりと重みをもった、そこはかとなく臭いのする紙幣を手にすることが多い。あまりに汚れているので、通貨として通用するのかどうか疑心暗鬼に陥る。そのため、誰もがその今にもちぎれそうなお札を先に使う。ババ抜きのパバである。そのため、その「パバ札」は、他のお札より多く使われて、さらに汚れていくはめになる。そして最後に「それは受け取れない」といわれるまで流通し続けるのである。

●デノミ後のコインの行方

今さらだが、インドネシアのお金は桁が非常に大きい。インドネシアに行ったことがある人なら、ルピアの桁の多さに戸惑つた覚えがあるだろう。現在一米ドルは約九八〇〇ルピアである。一万円を両替すると九九万四〇〇〇ルピアというような巨額になる。この桁の多さは経済取引を煩雑にしている。そこで、インドネシア政府はデノミネーションを計画している。日本同様、インドネシアでもデノミ案は出ては消え、消えては出ていた。現在の法案は二〇一〇年に提出されたもので、そのまま立ち消えになるかと思われたが、ここ数年の好調な経済成長を受けて自信をつけたインドネシアが、今度こそはと実現に向けて動き始めた。予定では現在の桁から三つのマルが落とされることになる。ルピアでもっとも桁の多い紙幣は一〇万ルピア札である。「これはASEANでは二番目に桁数が多い。」中央銀行総裁が二〇一五年のASEAN経済共同体設立を念頭におき、インドネシア紙幣の桁の多さを指摘している。ASEANのリーダーを自覚するインドネシアのお金の桁が多すぎるのは、

どうにも格好が悪いようである。

来年度デノミ法案が成立すると、現在の一〇〇〇ルピアは一ルピアとなる。一〇〇〇ルピアは新ルピア紙幣となるが、新ルピア硬貨は作られるのだろうか。一ルピアは一〇〇セン(sen)である。五〇〇ルピアは新五〇セン硬貨に、一〇〇ルピア硬貨は新一〇セン硬貨になるのだから、現時点でもあまり使われていない五〇ルピア、一〇ルピア硬貨が五セン、一センとして生まれ変わつても、果たして利用されるだろうか。デノミされれば、硬貨の出番も増えそうなものであるが、果たしてインドネシアではどうなるのか、中銀の調査を注意深く観察することにしよう。

(はまだ みき/アジア経済研究所
貧困削減・社会開発研究グループ)
《参考文献》

①Bank Indonesia Kendari
2010. Survei Preferensi Uang
Logam (<http://www.bi.go.id/NR/rdonlyres/95E0FABD-3E79-41C6-8A70-1BFEEEF7025/222229/10BoksUangLog-amOk.pdf>).